**説教20230101出エジプト34：1-9ルカ2：15-21「イエスと名付けられら日」**

**今日は、元旦ということで、ハッピーニューイヤー、おめでとうございます、という祝日でありますが、教会暦では、この１月１日を毎年、主イエス命名の日としてお祝いをしています。今日のルカの聖書箇所のとおり、飼い葉おけに寝かされた幼子に、イエスという名が与えられたのでした。イエスと言うのは、ユダヤ人によくみられる名前で、その意味は「ヤハウェは救い」「主は救い」という意味です。意味は重々しいが、よくある名前ではあるということです。**

**私たちの主メシアが、イエスキリストという具体的な名前を得たことの、喜ばしさは、彼を信じる者が、何時どこででも、彼と共に歩み、親しく生活できるようになったということでしょう。そもそも名前がない人と、いっしょに暮らすことなど考えられないからです。**

**ところで、羊飼いたちがこの、イエスというお名前を聞かされたのは何時だとおもわれますか。このことについては、聖書に具体的な記述がありませんので、私たちはそのことを黙想していくしかありません。。果たして、飼い葉おけに寝かせてある乳飲み子のもとを離れて、へと帰っていった、この羊飼いたちはの時点で、イエスと言う名前を聞いたのでしょうか。私は次の二つの説を考えました。**

**一つ目、この地上に、救い主がやって来られることを、多くの人が待ち望んでおり、そうしてベツレヘムに主メシアがお生まれになったのだから、そのイエスと言う名前も、静かにそして確実に、人から人へと語り伝わっていき、時を置かずして、マキバの羊飼いたちの耳にも入った。**

**二つ目、イエスと言う名前は、約三十年後にイエス様が両親のもとを離れて伝道の旅を開始するまでは、一般の人々には隠されていたので、羊飼いたちも３０年後になって初めてイエスという名前を聞いた。**

**この二つのどちらも可能性がある思いますが、皆さんはどう思われますか。イエスと言うお名前はすぐに伝わったのか、それとも３０年後になったのかというこの問題は、マタイ福音書に記されています、ヘロデ大王による、ベツレヘムとその周辺にいた２歳以下の男の子の皆殺しの記事を重ねあわせて考えますと、興味深いです。**

**時のヘロデ大王の耳には、イエスと言うお名前は、少なくとも２年後までには知らされることはありませんでした。ですから、大王は、２歳以下の男の子全てを手にかけるという暴挙をせざるを得なかったのでした。ヘロデ大王の統治と言うのは、いわゆる恐怖政治でありまして、大王はその二年間、町のそこかしこにスパイを送り込んで、飼い葉おけに寝かされた主メシアの噂を、必死で収集していたものと思われます。ところが、ヘロデ大王は、イエスと言うお名前も、イエスの居場所も全くうかがい知ることが出来ませんでした。これは実に不思議な事であります。**

**この２０００年前の社会には、もちろん７時のニュース等と言ったマスメディアはありませんので、情報は、人から人への口伝えが主になったと思われます。人から人への口伝えと言いますと、現代社会では、この数年でlineなどがとても発達しまして、数年前に比べて情報が盛んに口伝えされる時代になって来たようです。或る意味、２０００年前の口伝え社会に戻ったとも言えるでしょう。**

**それで、なぜ、ヘロデ大王にイエスキリストの情報が伝わらなかったかということを考えますと、今の世のlineの事情に照らし合わせると、理解の糸口が見いだせるように思います。**

**Lineによる言葉のやり取りは、実に言葉がの剣として働く、救いにもなれば、災いにもなるような場所であります。幼い子供にとっては、lineは手に負えないような道具であることでしょう。何しろ、相手の姿かたちが見えないところに、言葉を投げかけるわけですから、その言葉がどのように受け取られ、解釈されるのかをよく考えなければいけませんが、それでも、その全てを考え尽くすことは出来ないでしょう。同じ言葉でも、人によって受け取り方はさまざまであります。ある人にとっては喜びである言葉が、ある人にとっては非常に傷つく言葉であったりします。言い換えれば、lineという場は、言葉による伝達の正念場であると言えるでしょう。**

**さて、これからのキリスト伝道は、lineのソウシャルメディア抜きでは成し遂げられないかも知れません。時代に連れて、伝道の道具も変わってくるものです。一昔前は、文書伝道と言って、町のに、チラシなどを配って伝道をしていましたが、その方法もなかなか功を奏しない時代になったのではないでしょうか。それに代わって、lineやメールなどは、やり方によっては、優れた伝道の道具にもなってくると思います。私たちはそこで恐れて立ち止まってしまうのではなく、聖霊を受けて御心を行ってまいりたいと願います。**

**話が脇にそれましたが、ヘロデ大王の話に戻りますと、ヘロデ大王は、救い主である主メシアの誕生を喜ばないどころか、恐れていました。だから、ヘロデの耳にはいつまでたっても、救い主イエス様の誕生という良き知らせは、届くことがなかったのでした。今の私たちにも、この人には、まだキリストの救いをストレートに語るべきでない、逆に怒られるかも知れない、というタイミングがあるかと思います。それと同じようにして、ヘロデ大王とその周囲にいる人たちは、福音の良き知らせから遠ざけられ、イエスキリストのお名前を聞くことが出来なかったということが考えられるでしょう。**

**この教会に集められた私たち一人ひとりは、イエス様から名指しで呼ばれて、今ここに集められています。「尾崎二郎」教会へ行きなさいというイエス様の声を聞いたので、私はここに居るのです。説教ということは、名無しの権平によってなされることではありまん。このことは、教会が始まって以来変わることがない原則であります。ちゃんと名前を語ってから、説教をするという事は、語る者が、その語った内容に責任を持たされる、ということです。責任を持たされるというのは、間違ったことや、つまらないことを語ってはならない、ということではありません。そもそも、全ての人間は、説教を語るに相応しくない者たちですから、ここでの責任を持たされという意味は、説教を語り終わったあとも、最後の最後の時まで、その為された説教が自分の口から出た言葉であることを偽らずに、主イエスからの批評と裁きを甘んじて受けるということです。**

**今、ネット上で、主イエスの救いを実に甘い言葉で、実に巧みに語る人たちがいます。それで、いわばその甘い言葉にハマりこんでいくのですが、かなりはまってしまって、もう抜けだせなくなった頃にその言葉は偽のキリストの言葉だったというがわかるような仕掛けが設けられています。大変罪深い仕掛けでありますが、そこで特徴的なのが、この救いもどきの言葉が、名無しの権兵衛によって語られるということであります。名無しの権兵衛は、自分が以前に語った言葉の内容に責任を持たされることはなく、そのことによって批評や裁きを受けることもないのですから、これはまったくもって危うい、救いがない仕掛けだと言わざるを得ません。**

**反対に、イエス様と私という人間が、名前を呼び合って、公然と互いに奉仕しているという関係性は、そのこと自体が実に救いであります。このことは、説教という奉仕に限らないことで、主イエスに呼ばれて、この会堂に集まっている全ての人たちに当てはまることであります。奏楽、司式、献金、そして、この会堂に座って、主イエスに時間と場所をお捧げしているということ自体が、救われることであり、主イエスがその御名をもって、私たちに向き合って下さる喜びなのです。**

**私たちの救いの主メシアに、イエスキリストと言うお名前が与えられた、喜びと言うのは、このように私たち一人一人が持っている名前が、主の御前に、確かなものとされ祝福を受けるということであるでしょう。**

**ちなみに、英語ではイエス様のことは、ジーザスと言います。英語の教会では、イエス様のことは、ジーザス！ジーザス！と、おそれと尊敬と親しみを込めて、盛んにその名を言い表します。日本語の場合、わざわざ様を付けないと、何か尊敬の念が失われるという思いがありますので、様を付けて呼びならわしていますが、このことが却ってイエスとこの私との隔たりにならないよう、心に留めて参りたいと願います。**

**イエス様という、お名前が主メシアに与えられた事の喜びは、私たちがイエス様の御名によって祈ることが出来るようになったこと、そして、イエス様の御名によって伝道することが出来るようになったことに、具体的に如実に表れています。**

**今日の出エジプト記にも、モーセを前にして、主が御名を宣言された場面が記されています。３４章６節から**

**「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」**

**これが主なる神のお名前であります。実に長いお名前です。この旧約聖書だけを教典とするのがユダヤ教徒ですが、ユダヤ教と言うのも、或る意味開かれた宗教で、血がつながっていなくいても、主なる神を信じて、然るべき信仰の内容を習得すれば、誰でもユダヤ教徒になれるそうです。しかし、この主なる神のお名前一つとっても、その内容の習得には非常な覚悟と努力そして知性が求められるように思われます。**

**それに比べ、新約聖書が与えられ、イエス様のお名前が知らされているわたしたちは実に幸いであります。私たちは、御子イエス様の御言葉を素直に信じて、イエス様の御名によってお祈りし、イエス様の御名を告げ知らせていくことだけで、救われるのです。**

**イエス様のお名前を覚えるということは、とりもなおさず、私たち一人ひとりに与えられている自分自身の名前を大切にしていくということであります。私たちの最大の救いは、ヨハネの黙示録に記されています通り、小羊の命の書に自分の名が書いてあって、間違いなく永遠の祝福である新しいエルサレムに入れるということです。その最後の最後の時まで、私たちは自分に与えられている自分自身の名前を疎かにしてはならないのです。**

**洗礼を受けてイエス様と共に歩んでいる私たちには、もうすでに、この小羊の命の書に自分の名が書いてあります。そのことを確信しつつ、安心と喜びをもってこの一年の日々を主イエスと共に歩んで行けますように、お祈りしてまいりましょう。**

**お祈りします**

**天の父**

**主よ、あなたが、私達一人一人の名を呼んで、この新年初めの主の日に、今ここに集めて下さったことに感謝し、皆をほめたたえます。**

**この一年の一日一日を、主イエスと共に歩んで行くことが出来ますように。その歩みを祝し守って下さい。**

**又、今ここに居られない兄弟姉妹のことをも、あなたが守って下さいます様に。様々な隔ての壁が設けられている、現代社会にあって、私たちを一つにし、養い育ててくださる、あなたの慈しみとまこととに感謝し、その恵みの一つひとつを受け取っていくことが出来ますように。**

**永遠の命に続くあなたの道を歩むことは、御言葉を味わい、御言葉を語り、御言葉によって生きることです。どうか私たちがイエスと言う御言葉によって養われ、日々新しい命に歩んで行くことが出来ますように。**

**イエスによって養われている私たちが、自分の名前を大切にしながら、自分の名を高めるのではなく、イエスの名を高めるために、日々の生活を送っていくことが出来ますよう、私たちを励まし、元気をお与えください。**